

形成的評価による授業研究をつくる

北川 隆

(教育学科教授)

葉内 要

(伊丹市立伊丹小学校)

西川 啓子

(本学非常勤講師)

城戸 和人

(伊丹市立伊丹小学校)

子どもからみた形成的授業評価の歴史の変遷

現在の体育教育界において、形成的授業評価が授業の改善に役立っているのは周知の事実である。では形成的授業評価とは、どのような経過により研究・考察が重ねられてきたのかを紹介する。

形成的授業評価の先駆者としてあげられるのは、高田典衛である。1972年、高田は「よい体育授業の条件」は4つあると主張した。1981年に中村敏雄が「高田4原則」と命名し、今なお多くの教師に支持されている¹⁾。

その後、高橋健夫・林恒明・藤井喜一・大貫耕一ら、体育の授業改善に意欲をもつ体育実践者と大学で体育科教育学を学ぶ者が集まり共同して授業研究を始めるようになった。はじめは、名もない会合であったが、1989年4月より雑誌「体育科教育」に連載を始めることになったのを契機に、この集まりを「体育の授業を創る会」と呼ぶようになった。「体育科教育」への連載は、2年半の長きにわたっている²⁾。

さらに高橋らは「よい体育授業」の姿をめぐって様々な授業の観察分析をし、1996年に「体育授業研究会」を設立し、活動を続けている。

形成的授業評価について、高橋らは「高田4原則」を受け入れつつも、その方法が教師の経験的な考えに基づくものであり客観性の乏しさを指摘した。1994年、高橋らは統計的手法によって開発した4次元・9項目からなる簡便で実用的な形成的授業評価法を作成した。単行本

体育の授業を創るの中で、巻末に形成的評価票・形成的評価基準・形成的評価得点表等を掲載し、その方法が具体的にイメージできるように、実際の授業分析例を示した。さらに2003年発行の「体育授業を観察評価する」(明和出版)の中では、1993年の指導要録の改定に伴い、自学能力を育成するねらいから自己評価や形成的評価を促進させるための資料を数多く提供している。

その後も高橋の教え子たちだけにとどまらず、研究・考察活動が現在も広まっている。

このようにして、子どもからみた授業評価を通して授業を振り返る方法である形成的授業評価法が確立された。教員間での研修の際にも科学的データに基づく具体的な資料として使われ、授業改善に果たした功績は大きい。

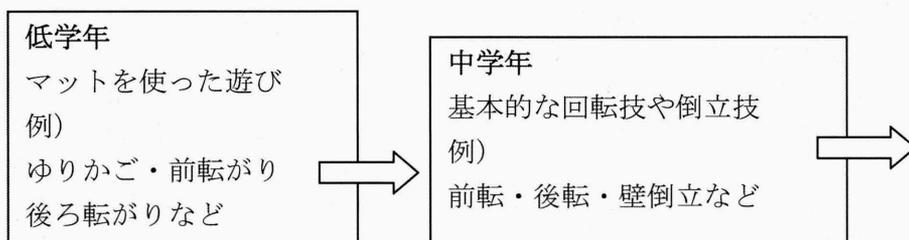
授業研究の実際

第6学年 体育科学習指導案

1. 日時 平成22(2010)年1月22日(金)
5校時
2. 場所 体育館
3. 学年・学級 6年3組(40名)
4. 単元名 マット運動
「みんなでマット」
5. 単元目標
・友だちと助け合い協力することによって、

- マット運動の楽しさや喜びを味わい、自分たちの興味のある技に取り組もうとしている。
(関心・意欲・態度)
- ・個人やグループの課題を見つけ、課題解決の方法を考えることができる。
(思考・判断)
 - ・回転・支持・バランスなどの運動ができるようにするとともに、それらを組み合わせ、グループで動きを合わせることができる。
(技能)

6. 指導にあたって



7. 単元構想(全8時間)

		第1次	第2次	第3次
学習活動		<ul style="list-style-type: none"> ・既習の技をペアで練習する。 ・新しい技や発展させた技に挑戦する。 	<ul style="list-style-type: none"> ・グループで技の動きを合わせる。 ・音楽に合わせて作品を創る。 	<ul style="list-style-type: none"> ・発表会をする。 ・学習全体を振り返り、自己評価する。
学習目標		<ul style="list-style-type: none"> ・技のポイントに注意してよりスムーズにできるようになる。 ・新しい技や連続技に挑戦することができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・友だちとアドバイスしあったり、励まし合ったりしながら練習することができる。 ・個人やグループの課題を見つけ、解決方法を考えることができる。 	<ul style="list-style-type: none"> ・みんなで演技をすることを楽しむことができる。 ・他のグループの演技のよいところを見つけることができる。
評価	関心 ・意欲 ・態度	<ul style="list-style-type: none"> ・マット運動に興味・関心を持ち協力して楽しく取り組もうとしている。 ・友だちと協力して準備・片付けをし、安全を考えながら学習しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・新しい技を自分たちの演技に取り入れようとしている。 ・兄弟グループとアドバイスしながら楽しく練習しようとしている。 	<ul style="list-style-type: none"> ・他のグループの演技構成に興味を持って見ようとしている。

規 準	思考 ・ 判断	・ 技のポイントや自分の課題を知り、自分のめあてを持つことができる。	・ 時間差で動いたり、動きの方向を変えたりするなど音楽に合わせて演技の構成を工夫することができる。	・ 自分たちのグループと比べて、他のグループのよいところを見つけることができる。
	運動 の 技能	・ 既習の技や発展技を組み合わせ、連続して行うことができる。	・ 友だちの動きや曲のリズムに合わせて動くことができる。	・ 練習の成果を発揮して、積極的に演技することができる。
時間		2	5 (本時 5/5)	1

8. 本時の学習 (第2次 第5時)

① 目標

- ・ 兄弟グループでお互いにアドバイスしながら

ら技を楽しんで学習することができる。

- ・ アドバイスを参考に演技を高めることができる。

② 展開

学習活動	指導上の留意点 (○指導者のはたらきかけ)
1. パワーアップタイム ・ 準備運動・基本的な技の練習をする。 2. グループごとの演技の確認 3. 本時のめあてを確認	<ul style="list-style-type: none"> ・ 十分な運動量が確保できるようグループごとに声をかける。 ・ パワーアップタイムが終わったグループからスムーズに演技の確認できるよう学習の流れを掲示しておく。
<div style="border: 1px solid black; padding: 5px; width: fit-content; margin: 0 auto;">兄弟グループでアドバイスし合おう</div>	
4. アドバイスタイム ・ 兄弟グループで演技を見せ合い、アドバイスをし合う。 A : 演技 B : アドバイス A : アドバイス B : 演技	○具体的なアドバイスをするよう声かけをする。 <ul style="list-style-type: none"> ・ 技のタイミング ・ マット上の位置 ・ 技の完成度 ・ マットの上で実際に動きながらアドバイスをさせる。 ・ 各グループを回り、練習課題を把握する。
5. アドバイスを参考にグループごとに練習	<ul style="list-style-type: none"> ・ この時間でよくなったところを発表させる。
6. 本時の振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・ よくなった動きや的確にアドバイスしていたところを紹介する。
7. 整理運動	<ul style="list-style-type: none"> ・ しっかり体をほぐさせる。

9. 授業研究の視点

2009年度 I 小学校 6 年 3 組 集団マツト形成的評価まとめ

1時間目	全体	1.85	2.39	2.70	2.82	2.67	2.67	2.33	2.91	2.88	2.58
	33 人	2.31			2.74		2.50		2.89		
	評価	2	3	4	4	3	4	3	4	5	4
		3			3		3		5		
2時間目	全体	1.89	2.34	2.74	2.63	2.74	2.74	2.71	2.89	2.79	2.61
	38 人	2.32			2.68		2.72		2.84		
	評価	2	3	4	3	3	4	4	4	4	4
		3			3		4		4		
3時間目	全体	1.78	2.39	2.69	2.86	2.89	2.67	2.83	3.00	2.89	2.67
	36 人	2.29			2.88		2.75		2.94		
	評価	2	3	4	4	4	4	4	5	5	4
		3			4		4		5		
4時間目	全体	1.97	2.52	2.66	2.97	2.90	2.83	2.76	2.90	2.79	2.70
	29 人	2.38			2.93		2.79		2.84		
	評価	3	3	4	4	4	5	4	4	4	4
		3			4		4		4		
5時間目	全体	1.81	2.41	2.56	2.84	2.84	2.75	2.69	2.88	2.72	2.61
	32 人	2.26			2.84		2.72		2.80		
	評価	2	3	3	4	3	4	4	4	4	4
		3			4		4		4		
6時間目	全体	1.82	2.47	2.74	2.76	2.82	2.66	2.61	2.82	2.63	2.59
	38 人	2.34			2.79		2.63		2.72		
	評価	2	3	4	3	3	4	3	4	4	4
		3			3		4		4		
7時間目	全体	1.74	2.41	2.59	2.94	2.82	2.82	2.88	2.85	2.65	2.63
	34 人	2.25			2.88		2.85		2.75		
	評価	2	3	4	4	3	5	4	4	4	4
		3			4		5		4		
8時間目	全体	2.12	2.71	2.53	2.94	2.85	2.82	2.91	2.91	2.74	2.73
	34 人	2.45			2.90		2.87		2.82		
	評価	3	4	3	4	4	5	4	4	4	4
		4			4		5		4		
9時間目	全体	2.43	2.68	2.59	2.89	2.84	2.86	2.68	2.95	2.62	2.73
	37 人	2.57			2.86		2.77		2.78		
	評価	4	4	4	4	3	5	4	5	4	4
		4			4		4		4		

まず、項目1の「感動体験」についてのところでは、1～8時間目は評価が2～3と低い値であったが、9時間目に評価が4に上がった。9時間目の授業は、今までグループで作ってきた演技を披露する学習活動であった。そのため、自分たちの演技を力一杯できたことや他のグループの演技に感動したことなどが感動体験に繋がったのではないかと考えられる。逆に1～8時間目までの活動にそういった「見せ合う場」を入れていくことで感動体験につながる事がわかった。

項目2では「技術の向上」の項目である。これは1～7時間目までは評価3で、8、9時間目に評価4に上がっている。ここから、積み上げて来た練習が成果、できなかった技ができるようになってきていることやグループで演技構成ができてきたり、友だちとタイミングを合わせて演技できてきたりしていることがわかる。集団マット運動において技術を向上させるためには、個人練習やグループ練習の時間が十分に必要であることもわかった。

項目3では「新しい発見」があったか聞く項目である。全9時間のうち7時間の評価が4であったことから、毎時間、何か新しい発見があったようである。個人技の上手にできるようなコツや演技のきれいな見せ方の工夫などを考えながら、子どもたちが取り組むことができたことがわかる。自分のことだけでなく、友だちの演技から、新しい発見することも多い。学習中では、「もっと勢いをつけたほうがいいよ。」「手の間隔を狭めたほうが安定するよ。」などの声が出ていた。個人競技であるマット運動を集団で行うことで「新しい発見」が多くなったと考えている。

項目4では、「意欲的」であったかを聞く項目である。全9時間のうち7時間が評価4であった。マット運動は「できる」「できない」がはっきりしているため、「できない」ことが多い子どもにとっては意欲的に取り組むことは難しい。また、「できる」子どもにとっては、物足りなさを感じる人が多い。だが、集団で取り組むことによって単に「できる」「できない」ではなく、

「見ていて飽きない技の順番」や「みんなで技を揃える」など価値観が多様化した。このために、学級全体が、常に高い意欲を持つことができたのではないかと考える。

項目5では、「楽しさ」を聞く項目である。高い評価を示した3、4時間目は、個人の活動からグループ活動に変わったところである。1、2時間目では、個人の活動のため、「できる」「できない」がはっきりしており、できない子どもの「劣等感」、できる子どもの「退屈感」が出て評価が上がらなかった。だが、「集団で行う」という価値観を与えたため、3、4時間目では、「できる」子どもも、「できない」子どもも楽しさを味わうことができた。5時間目で評価が再び下がったのは、グループとして「できる」「できない」が出てきたためと考える。この時、指導者が「できない」グループに対し、スモールステップを踏んだ助言や適切なアドバイスをしていけば、違った評価になったと考える。また、8時間目に評価が上がっている。ここでは、ペアグループで助言し合う活動に取り組んだ。自分たちでは分からないことを教えてもらい、演技に活かすことや他のグループを見ることに楽しさに繋がったのではないかと考える。

項目6では、「自主性」を聞く項目である全9時間のうちもっとも評価が高い5が4時間、残りも評価4と高い値を示した。特に集団で活動するようになってから評価が上がっている。これは「集団マット」の教材の特性だと考える。自分たちで演技を構成し、曲を選び、練習内容を考え、課題を見つけていく。マット運動のまとめの学習として適した教材であるといえるかもしれない。

項目7では課題をもって取り組めたか聞く項目である。ここでの評価は全9時間のうち7時間が評価4となっている。評価が低かった1時間目では、自分の課題が何かわからなかったためだと考えられる。そして、もう1つ低かった6時間目ではグループ学習において、ある程度自分たちの演技ができるようになっており、どこを直せばいいのかわからないグループが出てきたためと考える。

項目8では、協力して取り組めたか聞く項目である。ここでの評価は4以上の値を示している。単元全体として子どもたちは協力して取り組めたと考えられる。ここでは、男女比だけでなく、マット運動の技術やグループ活動での話し合いでのリーダーシップなどを考えてグループ作りをした。このように、個人の背景を考えてグループ作りをすることによって協力しあうことができたと考える。また、評価があがったのは、3時間目と9時間目である。3時間目では、初めてグループで練習し、協力して作り上げる楽しさを感じたため評価が上がったと考えられる。9時間目では、演技を披露し、今までの練習が形となったことで協力できたことを感じたのであろう。

項目9では、お互いに助け合えたかを聞く項目である。ここでは、1時間目と3時間目に評価5ともっとも高い値を示している。1時間目では、個人の技を練習する活動で、1つ1つの技に対する助言をし合うことができていたと考えられる。また、3時間目では、初めてグルー

プで活動し、演技の流れや、立ち位置などを教え合うことができたと考えられる。

各授業時間でみると、高い評価を示しているのが、8・9時間目である。集団として考えてきた演技が完成し見せ合うことで、様々な充実感を味わうことでできたと考える。逆に、最も評価が低かったのは、6時間目である。ここでは、どうすれば自分たちの演技がもっとよくなるのかわからない。停滞感を感じたグループが増えたため評価が下がったと考えられる。

このように形成的評価を取ることで、子どもの達成感や満足感をはっきりわかり、子どもの評価から指導者の課題や次の授業であるべきことが見えてきた。このような評価を重ねていき、より迅速に次の授業に効果的な手だてできるようにしていきたい。

参考文献

- 1) 吉野聡 (2010)「体育の授業評価」：新版体育科教育学入門大修館書店 P82
- 2) 高橋健夫 (1994)「体育の授業を創る」大修館書店 P3

Abstract

Historical Transition of the Formative Education Evaluated by Students

Today it is widely known that the formative education evaluation contributes to the improvement of class lessons. We introduce the process of the study and consideration of the evaluation went through in the past.

One of the pioneers on formative education evaluation is Norie Takada. He formulated the 4 principles that create “good physical education teaching”. Toshio Nakamura named the principles “4 principles by Takada” in 1981 and then the principles have had a broad base of support of teachers.

Afterwards practitioners such as Takeo Takahashi, Tsuneaki Hayashi, Kiichi Hayashi and Koichi Ohnuki who have strong desire to improve physical education and others who study the pedagogy of physical education at university gathered together and started class lesson research. Their group “ion” was unknown for the beginning. Takahashi et al. have investigated and analyzed various class lessons. And they established TAIKU JYUGYO KENKYUKAI (The Institute of Physical Education) in 1996 and continue their activities.

They adopted “4 principles by Takada”, but at the same time they pointed out the lack of objectivity. The principles were based on the experience of physical education teaching. They created simple and practical formative education evaluation method with 4 dimensions and 9 items which was developed on statistical technique in 1994. They showed sample analyze of actual class to understand the actual image of the method by inserting formative evaluation sheet, measurement, score card and others at the end of a book “TAIKU NO JYUGYO WO TSUKURU (Create physical education class)”.

Furthermore they provide a lot of materials to promote self-evaluation and formative evaluation to nurture self-study capability in the book “TAIKU JYUGYO WO KANSATSU HYOKA SURU (observe and evaluate physical education class)” (Meiwa Publishing 2003) according to the revision of the Japanese government guideline of education in 1993.

Afterwards the study and investigation activities on formative education evaluation are still expanding now among not only by the students of Takahashi but by a lot of people. In this way, formative education evaluation reflected on the class by students’ evaluation was established. It is used as concrete materials based on scientific data at teachers’ training and make a large contribution to improve physical education class.